



私のひとりごと

「奉仕作業」

今月は毎年恒例の、建築業組合員による奉仕作業を行う月である。奉仕作業は地区の民生員が、一人暮らしのお宅に限り困っている事柄を調べ、役場を通じ建築組合に作業依頼が来る流れになっている。日頃地域にお世話になっている私達にとって、ご恩奉じをするまたとない機会であるが、あいにく、組合員の高齢化と職人の担い手不足により、年々組合員の数は減少している。そんな中、奉仕作業依頼は皮肉にも増え続けているのが実情である。とはいえ、組合員の数と限られた時間の中で全ての作業をこなす事は到底出来ず、作業内容により行うか否かの判断に迫られるのである。その判断をする為に現場を訪れた時のお話を一部ご紹介させていただく事にする。

「こんにちは～」と何度も声を掛けるが反応が無い。お留守かな？と思い帰りかけると「どちらさん？」と、やっとお婆さんが登場。「庭の剪定を頼まれましたね。」と声を掛けると「はあ～・・・そんな事頼んだかなあ～？」との返事に次の言葉が出てこない。もう一度丁寧に依頼内容を説明すると、思い出された様子であるが、家の周りを見渡せば草木がかなり覆い



茂り、1日奉仕作業のレベルではとても出来そうもないのでお断りすることに。「量が多すぎて、とても出来ませんのでシルバーさんに頼んで下さい。」「はあ～？今度の日曜日やなあ～」「いやいや出来ません。」こんな会話を二、三度繰り返すが、とうとうお婆さんの粘り勝ち？で断りきれなかった。またあるお宅では・・・。門構えがあり、和風建築のとても立派なお宅。少し緊張気味に声を掛けると、若い頃はさぞかし美人であったと思われる気品のあるご婦人の登場。「あらあら、わざわざお越し頂きありがとうございます。」と丁寧な喋り方。職人氣質でガサツな私には少し近寄り難いタイプである。「どのような作業でしょうか？限られた時間ですので多くは出来ませんが」と私なりに丁寧な言葉で対応するが、「はいはい、存じ上げてお



りますよ。」と軽くかわされる。作業内容と言え、雨樋の詰りと屋根の上に瓦の漆喰（白い詰め物）の除去であった。私達にすればごく簡単な作業だが、一人暮らしのご婦人には到底出来難い作業である。またあるお宅では・・・。今度は納屋のトタンの張替えである。世間話をしながら作業内容を確認中にご婦人がポツリと一言。「主人が生きている時はウルサイだけだと思っていたけど、居なくなるとこんな作業も出来んのよ。」と、しみじみ言われる言葉は、家内に聞かせてやりたいと思うほど身につまされる。またあるお宅では・・・。こちらは毎年作業

依頼をされる方で、年に一度の訪問だが顔をしっかりと覚えていてくれる。「あら！藤本さん若くなったんじゃないの」とのお世辞にホイホイと仕事を引き受け、他の組合員から安請け合いしすぎだ！とお叱りを受ける。

そんなこんなで30軒以上のお宅を訪問する訳だが、よく話を聞いてみると、多くの方が一人暮らしではあるが、決して天涯孤独というわけではない。遠くに、また近くに、また隣に子供さん達が立派に生活しているのだ・・・。親元を離れてしまえばこんなものかと、心にわだかまりが残らなくはないが、作業を終えた組合員達が「喜んでくれて良かったなあ」と話し合っている姿を見ると、わだかまりはいつしか消え、心に明るさと喜びが湧いてくる。奉仕作業とは、そんな貴重な一日だ。どうやら人間は人のために働くことが、一番喜びを感じるようになってきているようである。

ではまた来月もお会いしましょう。
今月も最後まで読んでいただき・・・、

あーがしう
ごさいました!!

